

C-69 ゴシック服飾の背景—「年代記」を中心として
日本女大家政 佐々井啓

ゴシック時代には、建築、彫刻、タピストリーなどのすぐれた造形的な作品が生み出されており、服飾においてもこのような造形的な面からの研究が従来なされてきた。しかしここでは単にこれらの造形的な特徴を見出すのではなく、服飾が用いられた状況や、服飾に対する人々の意識を、その時代に書かれた文献等により明らかにすることを目的とする。

中心となる資料としては、ジャン・フロアサール (Jean Froissart) の著した「年代記 (Les Chroniques)」を用いた。本書は1327年から1400年頃までの百年戦争の前半部を詳細に記述したものである。したがって大部分は戦争などの事件の記録であるが、ここでは、そこに述べられている服飾の持つ役割や美的な表現性、それに対する人々の意識を中心に、他の文献や絵画資料を参考としながら考察した。

このような検討により、服飾は社会的な状況の中で用いられていることが理解される。たとえば、戦いにおいては、敵・味方の区別のためにある特定の衣服を用いたり、身分の上下を平常時よりもはっきりと示す必要から衣服を区別して用いている。さらに武勲をたたえるために衣服やマクセサリーを与えることもなされていたのである。このように服飾の社会的な背景を明らかにすることによって、服飾を社会との関連において理解することができ、さらに服飾に対する人々の意識をその点から把握することができる。